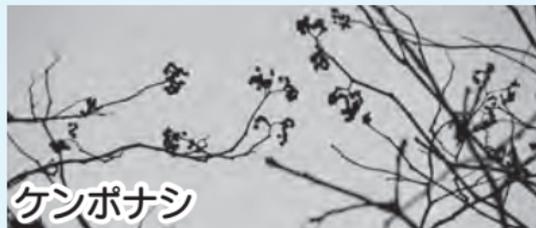




森林レンジャーがゆく

(68)

不思議のゆくえ



晩秋から冬の森で、果実が熟れ過ぎた様な甘い匂いが漂い、足元を探すと不気味な形の塊が落ちていることがあります。見上げると枝にもその塊が付いています。これは、ケンポナシという木の実です。初めて見た時は、不思議な形でまずそうだなと思いましたが、地面に落ちたものを食べてみると柔らかい梨の食感でバナナが熟れたように甘く、タヌキなどが好みそうな味。梨やレーズンの味だという人もいます。

このケンポナシは、タヌキやテンなどのほ乳類が食べ物が少ない早春まで食べています。特に、市内西部の山奥を拠点とするタヌキがよく食べていることが、ふんから見てとれます。

また、ケンポナシは古くから人の暮らしの中でも利尿や解毒に効く民間薬として利用されてきたようです。現代でも、ケンポナシ抽出物を

含む口臭予防ガムや二日酔いに効くといわれているお茶が販売されているとか。

実は、ケンポナシのおいしい部分は果実ではなく果軸で、簡単に言うと実と枝を結ぶ部分です。なぜ、わざわざ軸をおいしくしたのでしょうか。不思議です。実の部分には4mm程の種子が3個入っており、肥大した果軸と一緒に落下する頃に実は乾燥し、果軸が甘い匂いを漂わせませす。この匂いに誘われてやってきたほ乳類は、おいしい部分（果軸）とおいしくない部分（実）を丸ごと食べます。そして、ツルンとした種子は歯でかみ砕かれることなく飲み込まれ、ふんとして遠くへ運ばれるという、ケンポナシにとってもオイシイ結果が生まれます。森の不思議のゆくえを追うと、そこには「つなぐ」というキーワードが隠されているのかもしれない。（加瀬澤）